

<CIEC 第73回研究会報告>

テーマ 「教える授業から、学ばせる授業へ」
- PC カンファレンス「創発する学び」に向けて -

日時 2008年3月15日(土) 15:00~17:00

会場 大学生協杉並会館 204・205 会議室

司会 大木 誠一(神戸国際大学附属高等学校)

講演 "教える"授業から"学ばせる"授業へ ~人財育成イノベーションと創発の勧め~
妹尾 堅一郎 氏 (CIEC 副会長 / 東京大学)

意見交換 学びにおける創発とは

参加人数 19人

2008PC カンファレンスは「創発する学び」というテーマで開催されます。この「創発」という概念は、異なるものがお互いに関係づけられることによって、新たな「何か」を生み出すこと、あるいはそう見なすことを言います。これを受けて小中高部会では、そもそも「創発とは何かを明確に認識する」ところからスタートさせたく今回の研究会を企画しました。

講師に CIEC 副会長の妹尾堅一郎先生にお越しいただきました。事前に参考資料として國領二郎編著『創発する社会』(日経 BP 企画刊・2006年11月)をご推薦いただきました。初め「創発」には抽象的で難解な印象がありましたが、一通り読み進めた感想として、意外にも明解で実は身近にあることのように感じました。そして見渡せば、あれもこれも創発ではないかと思えることが目に付くようになったのです。ちょっとしたヒントが与えられただけで、混乱していたことがすっきり解決したり、違ったことのように感じたりすることはよくあることです。創発とは決して単純ではありませんが、そういう一面もあるのではないのでしょうか。

妹尾先生は「創発」について直接触れられる前に、「教える”から”学ばせる”へ ~より効果的な「授業」について考える~ ということについて具体例をあげて、図を示して解説くださいました。参加者の頭の上に次々と電球が点るがごとく、頭の中をすっきり整理してはっきり意識できた状態になりました。混沌として收拾がつかない現状を、二つの概念を対比させて考える(例えば、授業をどのように捕らえるかについて、知識移転の手だて派 VS 学習の促進「の場と機会」の提供派など)ことによって明確になることができました。

妹尾先生の話の最初のポイントは、互学互習における教員の役割についてです。

■人「財」育成について

教育とは、

- 授業を教員の知識を学習者に移転するのではなく、学習促進の場と機会の提供ととらえること。
- 学習者が、みんなと同じことが言え、かつ、他人と違うことが言えるようになるようになること。
- 知をワクワクしながら学んでいける「学習者」を創造していくこと。
- そういう人財が、社会で必要な人材であり、社会の財産であること。

■教育のモデルについて

知識伝授モデル

- 「確かめられ・体系立てられた・知識を・知っている人から・知らない人へ・順序だてて・教える」こと
- 学校の基本的概念であり、スタイルはすでに完成されている。
- 学習者は教員の知識を越えることができない。

互学互習モデル

- 学習者がすでに持っている経験や知見を活かす。
- それぞれが持っているものを教え合い、学び合う。
- 教員も受講生と共に学びあう。
- 結果それまでとは違った、全く別の性質ものが出来上がる、それが創発である

■教員の役割について

そこでの教員の役割は、学びの場と機会をプロデュースすること。様々な形態の授業をプロデュースするのは間違いなく教員であり、時にはファシリテーターにもなる。

- また、学びの確認者（アンカー：テレビのニュースキャスターのように最後にまとめる人）議論だけではいけない、それなら居酒屋でもできる。

また、議論だけ行い、学んだ気になる場合があるので注意。

- さらに、学習者

授業という場で実際に教員は学んでいる。

リサーチャー学術的知の創出する場にしてもよい。（研究者にもなりえる）

授業法と知の獲得をピラミッドで表した「ラーニングピラミッド」によると、講義で学習者が得られる知は、語ったことの 5%程度。デモンストレーションで 30%、ディスカッションで 50%、学習者が理解して他者に教えることで 80%。

意見交換の時間は、妹尾先生への質問が中心でした。妹尾先生は、逆に参加者に対して問いかけを行い、考えさせられたり納得させられたりしました。その内容は、以下の通りです。

教員の役割としては、まず学習者が「うっそ〜ホント!?!」「そうそう、そうだよね」「なるほど、そうだったのか」等々の身近な事例を通じて学習の場の学びと気づきのきっかけを持ち込むこと。自らの持つ知識と経験から、あの手この手で学習者が学び合う、刺激しあうワクワクするような授業を創出する。それを通して考えさせ、学習効果が高まるように努める。最後には、アンカーとしての確認を怠ってはいけない。今日はどこまで何を学んだか、気がつかなかったことや議論に及ばなかったことは何か、そこを明確にしてやることのできない人に教員の資格はない。

小学校の1年生から大学生まで、1学期の4月から1年中このような授業ができるわけではない。学習者の性格やクラスの特徴、配慮しなければいけないことはたくさんある。だからこそ、日々の授業を実践的経験として積み上げながら、その経験から自らが学んでいることを楽しんで見せて、結果、学び続けることを楽しめる人財を育成していくのである。

教員自身が、たとえば CIEC のような場で違った立場の意見を聞くと、それを刺激として自分の授業に変化をもたせることができる。一見関連がないような事柄でも自分流に加工すると、自分の中にはなかった別物が自分の武器のひとつになりえる。教員こそが、一番先に創発せねばならない人種なのではないか？

最後に、妹尾先生が創発について次のようにまとめられました。

たとえばクラスをグループに分けて学習させる。

それぞれが違ったテーマで調べ学習を始める。そのうち、影響を与え合う。

それが整理されて、ひとつの学習となる。

あるいは、同じテーマで調べ学習を始めても、そのうち、違った方向へ伸び始める。

別の方向を向いたために知らなかったことが、次第にわかってくる。

最後には、全体として思いがけない新しい結果が得られる。

異質のものを一箇所に集めて、混ぜてみたら初めの個々の要素にはなかった別のものが新たにできあがる。これが創発である。

時間の最後に寄せられた参加者のアンケートには次のような意見がありました。

- 考え方を整理できた。
- 先生方が今日の話聞いて帰って変化をおこすのが一番大変。
- 先生方の継続的な学習、訓練、機会をどう設けていくかも課題だと思いました。

- 創発が特に面白かったです。

このように、人財育成としての教育の意味、教育のモデル、教員の役割という段階を踏み、最終的に創発までたどり着いたわけですが、「わかった・面白かった」「勉強になった」で終わることは許されず、何がどうわかって、これからどうするのか？が重要な点と認識しながらの散会となりました。

(文責：辰島裕美)